

# イチゴ高設栽培の安定生産に向けて

## はじめに

作業姿勢改善のために考案されたイチゴの高設栽培は、各地の試験場やメーカーで様々な方式が開発され、全国的に増えつつあります。

本県においても、奈良方式高設栽培システム(ピートベンチ)に早くから取り組んできました。ピートベンチの特徴は、汎用的な部品で組み立てられること、緩衝能が高く軽量の培地であること、施肥管理を従来の土耕栽培で用いていた緩効性肥料を条間に施用する方式(置き肥方式)としていることなどで、低コストでの導入が可能です。

奈良方式は平成10年に試験導入され、その栽培面積は年々増加しつつあります。県内では、奈良方式以外にもいくつかの方式が導入されており、現地ではピートベンチと市販の給液制御装置を組み合わせたものが増えてきています。



イチゴの高設栽培

現地での栽培、技術センターでの試験を通じていくつかの問題点が明らかになってきました。その中から施肥方法と培地について解説します。

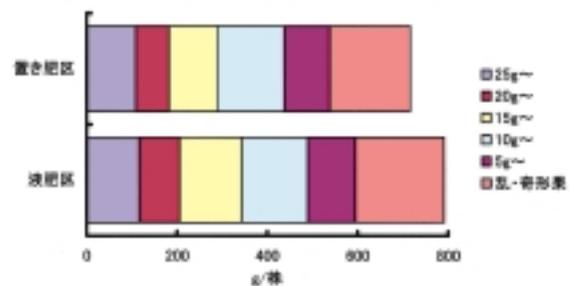
## 1. 施肥方法について

置き肥方式ではマルチング後の追肥に多大な労力がかかり、また、肥料の溶出速度を制御することが難しいため、追肥時期の判断が容易ではありません。

そこで追肥作業省力化のために、従来の土耕栽培で行われているように液肥で追肥する方法を検討しています。置き肥方式では5月までの

栽培期間中に5回の追肥が必要でしたが、マルチング前に緩効性肥料を追肥後、12月から灌水時に薄い液肥を施用しても、置き肥方式と同等以上の収量が得られました。なお、このことは現地試験においても確認しています。

また、環境に優しい栽培を目指して、給液量、施肥濃度などを含めた施肥方法の検討を行い、排液に含まれる肥料分を削減することにも取り組んでいます。



置き肥区：緩効性肥料5回追肥

液肥区：緩効性肥料1回追肥+12月から液肥

図 追肥方法が収量に及ぼす影響

## 2. 培地について

ピートモスは撥水性が高く、一度乾燥させてしまうと吸水しにくくなりますが、逆に保水力が高いことから湿害を生じる危険性もあります。また、連用年数の増加にともない、物理性、化学性が変化することが懸念されます。

培地の水分については、十分に灌水を行うことと、不織布の下垂部分の長さを10~15cmにして余剰水を排水することで、生育に適正な範囲に維持できることがわかっていますが、イチゴの生育に及ぼす湿害の影響は明らかになっていません。そこで、生育や収量を左右すると考えられる定植から活着期の培地の水分状態と発根の関係について、現在、試験を行っています。

また、培地の連用については、5~6年の連用で収量が低下する問題はありませんが、資材の投入により物理性を改善して生育を安定させる方法を検討しています。

(野菜栽培チーム 矢奥泰章)